

援助職のリカバリー

《21》

～「セックスレス」に立ち向かう(2)～

袴田 洋子

朝晩の空気が冷んやりと感じられるようになった11月半ば、ある在宅患者の処方箋が薬局に届いた。「肺がん末期で、最期まで自宅で過ごす意向」とその主治医から聞いていた。京子たち薬剤師は、最近では、在宅で過ごす患者たちにも薬を届けるようになってきている。薬局で会う患者たちと違って、自宅に行くと、当たり前だが、人それぞれの生活の営みを目の当たりにする。その人が、どういう仕事をしてきて、どういうことが好きで、どんなふうな日常を送ってきたのか、「患者」の前に「一人の人」という印象を強く持つ。在宅にいる患者を訪問するようになって、京子は自身の薬剤師という役割の深さをより一層考えるようになっていた。それは、京子にとって、薬剤師という専門職としてのやりがいにつながっているように感じていた。

その日の夕方、処方された薬を持って、京子は、その末期がんの患者の自宅に向かった。築40年くらいは経っていきそうな一戸建ての家の中は、妙な「間」の多さを感じた。人が住んでいるのに、住んでいないような、最近の「生活感が感じられないオシャレな部屋」というのとは違い、「家族の営み」が無いように感じられた。理由は、長男夫婦が留守で、中学生と思われる孫息子が京子の対応をしたから、ということだけではないように感じた。

「ここで、この家で、最期まで過ごす、という意向なのか」と、思わず京子は、この患者の意向を思い出していた。これまでも何度か、医療サービスや介護サービスを受けながら、自宅で旅立ちを迎えた終末期の患者の担当をしたことがある。どこの家も状況や家族構成など、当然ながら、全く違っていた。が、不思議と共通している

ものがあった。それは、どの患者たちも「終末期に家族全員で関わる」という雰囲気であった。

超高齢社会を乗り切るためなのかどうなのか、「住み慣れた自宅で、最期まで過ごせるように」と国が言い出して、「往診」をする地域のクリニックが増えてきた。在宅医療を専門とするクリニックも少しずつだが増えている。そのようなクリニックが主治医となり、介護保険のヘルパーや訪問看護を利用して、自宅で最期まで過ごせることは、珍しいことではなくなってきた。とは言っても、人が死ぬということは、大変なことである。歩けなくなり、食べられなくなり、トイレに行けなくなり、終末期に入った人は、日常生活の様々な面で、介護が必要になってくる。そこに対処するには、家族全員で「関わる」ことで可能になると、京子は、在宅の患者の家に訪問するようになって、感じていた。

京子を本人の部屋の前まで案内すると、孫息子は、「自分はちょっと出かけるので」と言って、家を出て行ってしまった。心配している様子を1ミリも見せない孫息子の態度に、祖父の病気のことを知らないのだろうか、とやや疑問に思いながらも、気を取り直して、「こんにちは 薬を届けに来まし

た」とドアの向こうに声をかけた。中から、「ああ、どうぞ、入ってください」という返事が聞こえ、ゆっくりドアを開けると、部屋の中で、克彦は、洗濯物を畳んでいた。「息子は、仕事でいないから、すみませんね」と、克彦は謝りながら、京子を見た。穏やかに微笑を浮かべる克彦の表情を見て、ようやく京子は、緊張の糸が途切れた気がした。そして、今回の病気のことや病院のこと、処方薬の中には、痛み止めが入っていること、自分がどんなふうに訪問するかなど、一連の説明と確認を済ませた。克彦は面倒くさがることなく、丁寧にひとつひとつ答えていき、京子は、「紳士的な人だな」という印象を持った。

末期ガンという状態の患者に、何人も会ったことがあるが、その様子は様々だ。自分の病気が受け入れられず、医療を恨みながら自宅で過ごしている人もいた。ある人は、末期ガンだと分かっているのに、「これを食べたら治るかもしれない」と言って、一生懸命、食事を摂っていた。

そんな過去に出会った患者たちのことを思い出しながら、京子は、家族について、克彦に尋ねた。「息子さんは、リハビリ関係のお仕事をされているそうですね」と言うと、「そう、整形外科の中にあるリハビリ室で、課長

をやっています」と、長男のことを教えてくれた。京子は、ジェノグラムで、長男の妻や孫息子たちのことを書き留めながら、克彦の家族のことをあれこれ想像した。妻は、8年前に脳卒中で亡くなっていた。

ジェノグラム面接を終え、京子は、処方薬について、もう一度説明をしようとしたが、ここで時間をかけると、克彦の疲れが増すことの方が気になり、帰ることにした。訪問診療は、2週間ごとに行われるため、京子が次に来るのも、約2週間後だ。克彦は「また、顔を出してくださいよ」と穏やかな口調で京子に言い、再び洗濯物を自分の部屋の中に干し始めようとした。が、その瞬間、よろめき、柱にぶつかりそうになった。京子は、とっさに克彦を抱きかかえて、床にすわらせた。「いやあ、最近、体力が落ちてしまったようですね、このあいだも自転車で転んでしまったんですよ」と笑いながら言う克彦を見て、京子は、力が抜けて床に座り込んでしまった。なぜ、このような病状でありながらも、克彦は自分の洗濯物を自分の部屋に干しているのか、家族は誰も手を貸さないのか、ジェノグラムに書いた克彦家族のことを思い出しながら、京子は「危ないから、今日は手伝いますよ」と言い、洗濯物を干してやった。

薬局への帰り道、京子は「あの人が、自宅で最期まで過ごすのか。大丈夫だろうか」とぼんやりと今後のことを想像した。人が死ぬ、ということは、本当に大変なことなのだ。克彦の家族としては孫息子にしか、今日は会わなかったが、しっかり関わってくださるのだろうか、と、気がかりになった。

薬局に着くと、夕方の診察を終えた患者が数人待っていた。日が短くなってきたので、11月にもなると午後の遅い時間は、患者が少ないように思うが、そんなことはない。仕事を終えてから、クリニックに来る患者も多く、京子たちが仕事を終えるのも19時近くになることもある。ばたばたと、処方箋と健康保険証を確認しながら、薬剤を取り揃える同僚の中に、京子は古川の姿を見つけた。「真面目で、シャイで、謙虚な古川さんも、二人目の子どもが生まれたということは、夫婦の営みがあるということなんだ」と、古川を見るたびに、京子は、自分たち夫婦がセックスレスであることを思い出し、何となく気分が滅入るように感じていた。